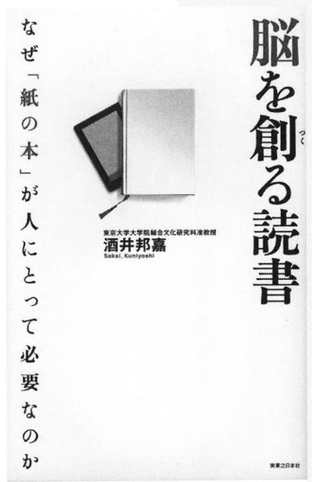
新連載

# 心の言葉とサイエンス

# 『脳を創る読書』著者解題

**昨今ブームの電子書籍に押されがちな紙の本ですが、脳と読書の関係を読み解いていくと、紙の本だけが持つ力があるとわかってきます。子どもにとって絵本とはどんな可能性を持っているのでしょうか。脳科学の分野から、検証してみましょう。**

東京大学教授 酒井 邦嘉




『脳を創る読書』
著／酒井 邦嘉
1,200円（実業之日本社）

『脳を創る読書―なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』という本が出てから1年が経つ。この本が縁でたくさんの方々とお会いしたり、手紙をいただいたりした。その方々の仕事も、出版社、製紙・印刷・製本・装丁、書店、図書館のように、本に直接携わるものから、医学や教育関係にまでに及んだ。一方、電子書籍推進派の方からもインタビューを受け、どうしたら紙の本と電子書籍を賢く選択できるか議論することにもなった。こうした新たな経験を通して、私の専門である言語脳科学の問題について、具体的で多角的な視点が得られたのは幸運であった。

この本のきっかけは、実業之日本社より取材依頼を受けたことで、研究室で4回に分けて長時間のインタビューが行われた。折しも電子書籍や電子教科書の問題がクローズアップされてきたことでもあり、一種の文明論のような形で、電子化について日頃考えていることをまとめてみたものである。日本では、1日1軒以上の割合で書店が消えつつあるという。電子書籍の出現によって、出版界のこうした厳しい状況に追い打ちをかける形となった。「紙の本」か電子書籍か、という問題は、単なる読書のメディアやスタイルだけの違いではない。「紙の本」を支える豊かな出版文化をどのような意味で見直して未来に継承していくか、という大切な問題でもある。

そもそも、文章を電子化してもその内容自体は変わらない、というところに盲点がありそうだ。電子化された情報は、いわば「裸の王様」であり、専用端末は「王様の新しい服」である。このハイテクの衣装をまとった電子書籍は、賢い人には「見える」と宣伝されるだろうが、確かに本が持つべき目に見える特徴や個性は無い。王様の威厳を示す上で衣服が重要であるように、本の内容を理解する上で装丁や製本はとても大切なのだ。だから、たとえ一方的に電子書籍が宣伝されようとも、臆せず「王様は裸だ」と言わねばなるまい。

それでは、「紙の本」の有用性は言語脳科学からどこまで実証できるだろうか。実は、これが『脳を創る読書』の読者から一番多く受けた質問でもあった。脳研究の実験自体はおそらくそれほど難しいものではなく、現在の技術で十分実現できるものであろう。むしろ難しいのは、どの著者の本を選ぶのかという問題や、どのようなフォント・サイズ・レイアウトで提示するのか、そしていかなる読者を調査の対象とするかである。なぜなら、こうした要因の一つ一つは、実験結果を大きく左右する可能性があるからである。さらに電子書籍と対比するとなると、どんな専用端末を用いるのかが重要な問題となろう。そして、ひとたび結果が公にされたなら、他の専用端末はどうなのか、ということがすぐに問題となるから、新機種が出るたびに実験を繰り返さなくてはならないだろう。専用端末の問題点が指摘されれば、それに絞って対策を立てられるだろうから、実験と新機種の開発はいたちごっこになりかねない。本を総合的に調査するための研究機関を世界に先駆けて立ち上げない限り、肝心のデータが蓄積しないまま、電子化をめぐる不毛な論争が続けられる可能性が高いのである。

ところで、タイトルにある「脳を創る」という言葉には、次の三つの意味を込めた。第一に、読書を通して言葉の意味を補う「想像力」が自然に高められるが、この想像力は行間を読む能力であり、眼光紙背に徹することで鍛えられていく。第二に、読書を通して思索に耽（ふけ）ることで、自分の言葉で「考える力」が自然と身につく。そして第三に、読書経験を通して、脳が変化し成長する。これらはすべて「脳を創る」ことにつながり、その目的には紙の本が必要なのである。

紙の本を絶やさないためには、子どもに紙の本の価値と読書の楽しみを直接伝えていく必要がある。それには、まず家庭から本棚が消えてしまってはいけないだろう。これまでの子ども部屋であれば、幼少時のお気に入りの絵本が並び、成長と共に図鑑や百科事典などが増えていき、そしてさまざまな本やコミック・雑誌などが加わっていくのが普通であった。それがすべて電子化されてしまったら、子どもたちにいったいどんな心の変化が起こるのだろうか。そのことを憂える教育者や保護者は、今どの程度いるだろう。

子どもの言語は、心の発達とは独立したプログラムに従って身につくと考えられている。子どもが最初に接する本は絵本であり、言語と心の両方に働きかけることのできる最良の「教材」だといえる。それは、言葉を通して初めて読書の喜びに触れ、同時に心の想像力を膨らませる貴重な機会でもある。大人が本を愛し、子どもに絵本を読みきかせることで、無限の広がりを持つ言葉の世界へ、最初の扉が開かれるのだ。子どもの持つ素晴らしい吸収力を考えれば、「この本は子どもには難しすぎるのではないか」と大人が躊躇（ちゅうちょ）する必要など無い。人間の持つ言葉の力こそが、子どもの脳を創り、豊かな心を育んでいくのである。

さかい・くによし
1964年東京都生まれ。東京大学大学院修了、理学博士。92年東京大学医学部助手、96年マサチューセッツ工科大学客員研究員、97年東京大学教養学部助教授・准教授を経て、2012年より同教授。02年第56回毎日出版文化賞、第19回塚原仲晃記念賞受賞。専門は言語脳科学および脳機能イメージング。著書に『言語の脳科学』『科学者という仕事』（ともに中公新書）、『脳の言語地図』『ことばの冒険』『こころの冒険』（以上明治書院）、『脳を創る読書』（実業之日本社）ほか多数。